

釜石の歴史

よもやま話

9

歴史のさんぽみち編

(4)

問い合わせ
市文化振興課 27-5714

釜石に眠る遺跡

弥生時代編

時代の変化と市内の遺跡

弥生時代は約2100年前ごろに繁栄し、縄文時代の狩猟・採集・漁撈中心の社会から、稲作を行う農耕社会へと変化する時代です。市内で見つかる弥生時代の遺跡も縄文時代に比べ、発見数が1割程度に激減します。これは時代と共に集落のあり方などが変化し、ためと考えられます。

なお、これまで釜石を含め、東北地方は農耕文化の伝播が遅く、弥生時代に入っても縄文文化を継承したと考えられてきました。しかし、青森県弘前市の砂沢遺跡で弥生時代の水田跡が発見されて以降、稲作などの農耕文化は早い段階で伝播し、縄文文化との融合を図ったことが分かってきました。

釜石を代表する弥生の遺跡

市内を代表する弥生時代の遺跡は室浜遺跡です。

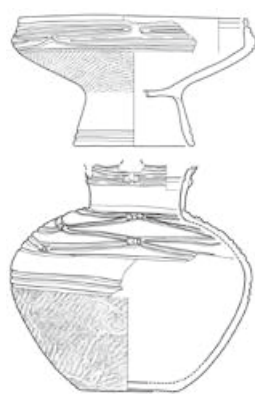


室浜遺跡の竪穴住居跡り、片岸町の室浜地区に所在しています。室浜遺跡からは竪穴住居が複数発見された他、土器捨て場らし

き土器密集地も見つかりました。弥生時代前期から中期の珍しい集落遺跡です。

縄文土器のような弥生土器

弥生時代の前期は、工字文と呼ばれる幾何学模様と縄目模様の土器が使われます。縄文時代の特徴を残しながら、壺など弥生時代に特徴的な形が取り入れられます。



弥生時代前期の土器

左の写真は室浜遺跡から出土した弥生時代中期の小型の土器です。縄目朱が塗られており、儀式などで使われた特別な土器と考えられます。



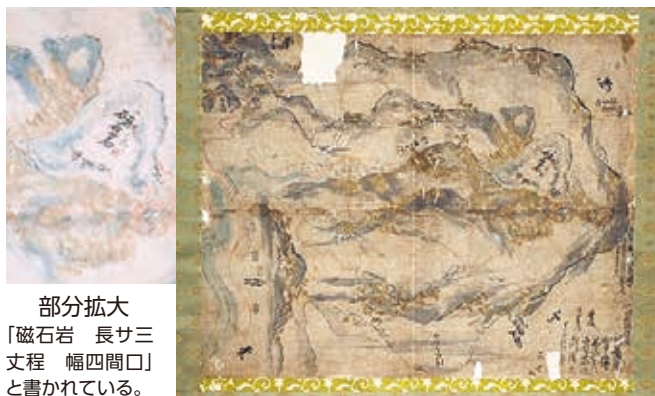
弥生時代中期の朱塗小型鉢

阿部友之進と大橋磁石岩絵図 市指定文化財

阿部友之進は、名を照任、または輝任といい、友之進や将翁は通称でした。江戸時代の本草学（博物学）の中心人物の一人で、平賀源内は孫弟子にあたります。山田町豊間根に生まれ、没年は宝暦3（1753）年で、享年104歳であったといわれています。徳川將軍吉宗の時代、阿部友之進は幕命により薬草や薬石を採取するため、日本各地で調査を行いました。

釜石の地を訪れたのは、享保12（1727）年のことで、甲子村仙人で磁石が掘り出されたのは、阿部友之進の発見とされています。この磁石とは磁鉄鉱のことです。この時の磁石10貫56匁（約380kg）が江戸に運ばれました。また、享保14（1729）年にも、再び釜石を訪れ、調査を行いました。

阿部友之進の磁石の発見から、86年後の文化10（1813）年、御山奉行小川清六一行による甲子村大橋の磁石岩の調査が行われ、甲子村の肝煎らが立ち会いました。写真の「大橋磁石岩絵図」は、当時の調査によるものでその貴重さから、市指定文化財に指定されました。この絵図には磁石岩や地名などが記されており、磁石岩の大きさは「長サ三丈程幅四間」（長さ約9m、



市指定文化財「大橋磁石岩絵図」（野田家所蔵）

部分拡大
「磁石岩 長サ三丈程 幅四間口」と書かれている。

幅約7・2m）とあります。この岩は、大正11年の「史跡名勝天然記念物台帳」に記され、写真も残っていますが、残念ながら昭和20年代の発破の際に陥没してなくなりました。

享保12年の阿部友之進による磁石発見から130年後の安政4（1857）年12月1日、大島高任は大橋の地で磁鉄鉱を用い、洋式高炉による鉄の連続出鉄に成功しました。この年の旧暦12月1日は新暦の1月15日にあたります。この日、鉄のまち釜石の幕開けとなりました。

